

ロシア産育習俗考

栗 原 成 郎

Ⅰ 子供の由来 —ポレーシエの伝承を中心に—

“赤ちゃんはどこから来るの”という幼い子供たちの素朴な問いにたいして親たちはさまざまな答えを用意した。そのうちで“赤ん坊はコウノトリが連れて来る”という説明はヨーロッパでは伝承化されて最もよく知られている。

ドイツでは大人が子供に赤ん坊の由来を説明するにあたって“Die Kinder bringt der Storch”“子供はコウノトリが連れて来る”、“Der Storch holt die Kinder aus dem Teich”“子供はコウノトリが池から連れて来る”“Der Storch hat die Mutter ins Bein gebissen”“コウノトリがお母さんの脚を噛んだ”などと言う。子供を連れて来る者（Kinderbringer）をコウノトリとする伝承はドイツでは北部と中部に見られる。子供を連れて来る者にはほかにフクロウ、小ガラス、大ガラス、狐、産婆、聖ニコラウス、水魔などがある。

このような地域によって異なる民間伝承の分布を示す地図の作成が試みられている。

ドイツには『ドイツ民俗学地図 Atlas der deutschen Volkskunde』があり、フランスの方言地図に触発されて、マイアー、シュパーマーらの民俗学者の指導のもとに 1920 年代の終りにベルリンで民間習俗の分布地図の作成が精力的に行われた。23000 の学校所在地に 243 項目の質問表を配布し、それによって得られた成果が 1940 年までに 120 枚の分布地図として公刊された。『ド

『イツ民俗学地図』の一例に“誰が赤ん坊を連れて来るのか”の分布地図がある¹。

ロシアでは科学アカデミー・スラヴ学研究所（旧「スラヴ・バルカン学研究所」）の N. I. トルストイ Н. И. Толстой のイニシャティヴの下に 1970 年代からポレーシエ Полесье [ベラルーシ南部・ウクライナ北部・ロシア西部にわたるプリピャチ川・ドニエプル川・デスナ川流域の低地。古代スラヴ人の“原郷”の一部と推定される地域で、スラヴ・フォークロアの宝庫と見なされている] において民俗地図の作成と古代スラヴ精神文化の再建を視野に置いた民間伝承の民族言語学的調査が精力的に進められてきた。

このポレーシエの民俗研究の一連の成果の一つに L. N. ヴィノグラードヴァ Л. Н. Виноградова の民俗地図作成を含む研究「赤ん坊はどこから来るのか。子供の誕生についての伝承の決まり文句」²がある。

ヴィノグラードヴァはウクライナ・ポレーシエの 46 箇村（62 地点）における調査に基づいて（1）“赤ん坊はコウノトリが連れて来る”，（2）“赤ん坊は天から落ちて来る”，（3）“赤ん坊は植物のなかにいる”，（4）“赤ん坊は樹の上に／森の中にいる”の伝承の分布を示す 4 葉の民俗地図を作成した。

（1）“赤ん坊はコウノトリが連れて来る”

ヨーロッパ諸国に広く知られているこの伝承はポレーシエにおいても最もポピュラーな言い伝えの一つであるが、その分布はプリピャチ川流域を中心とする西部ポレーシエに集中して見られ、東に行くにつれ伝承の通俗性がまばらになる。

“赤ん坊はコウノトリが連れて来る”という伝承はスラヴ世界では西スラヴ人のあいだで最もよく知られており、東スラヴ人、南スラヴ人のあいだでは稀である。

“赤ん坊はコウノトリが沼から連れて来る”（ポーランド）

“赤ん坊はコウノトリが籠／たらいに入れて連れて来る”（ソルブ）

“コウノトリが暖炉の煙突から蛙を投げ入れ、蛙は煙突を通ると乳飲み児となる。コウノトリが牧場か畑で拾った蛙は将来農夫になり、海辺で拾った蛙は漁師になる” “コウノトリが赤ん坊を沼の中／海の中から拾い上げ、籠／桶に入れて運んで来て、暖炉の煙突から家の中に投げ入れる”（カシューブ）

ポレーシエの伝承も西スラヴのそれに類似して“赤ん坊はコウノトリが暖炉の煙突から投げ入れる”と言って子供の由来を説明する。

“Бусько принёс” “コウノトリが連れて来た” / “Бусько кинул” “コウノトリが投げ入れた”は“子供が生まれた”ことを意味する慣用句となっている³。

子供を連れて来る鳥は、ポレーシエとウクライナの伝説では、コウノトリの他にカラス、ツル、ガチョウ、オオタカであるが、ポーランドの伝承では、それにハクチョウ、トビ、カッコウ、カモメが加わる。

子供を連れて来る者（Kinderbringer）は鳥とはかぎらない。動物、人間、神話的存在である場合がある。動物では、ウサギ、ウマ、ウシ、ブタが知られている。ヴィノグラードヴァがポレーシエで得た情報によれば、野性動物ではウサギのみが知られており、“ウサギが子供を連れて来てキャベツの中に隠す”。ウクライナでは“雌牛が子供を角の上にのせて連れて来る”，と言う。

ポレーシエの伝承では子供を連れて来る者は、人間では産婆が最も普通であり、つづいてジプシー、ユダヤ人、隠者などの“異人”である。西スラヴ人のあいだでは水魔（河童）、水の精、真昼の精などの神話的存在のほかに聖ニコラウスが赤ん坊を連れて来る、という言い伝えがある。

（2）“赤ん坊は天から降りて来る”

ヴィノグラードヴァはこの伝承の分布地図を作るにあたって（a）“赤ん坊は天から落ちて来る／赤ん坊は神が天から降ろす（空を飛んで来る；糸を伝

わって降りて来る)”と (b) “母親がオートムギの刈り入れをしていたら、赤ん坊が空から落ちて来た”の二種の伝承形式を記号で区別した。(b)の伝承はプリピャチ川以南(右岸領域)にのみ見られる。この伝承は赤ん坊の起源が天的な存在であることを暗示していて興味ぶかいが、特に(b)の分布が見られるポレーシエ西南部の表現形式では“天”と“オートムギ”が《небёс-овёс》と韻を踏んだ点が注目される。

(3) “赤ん坊は植物の中にいる”

この伝承の表現には——菜園の中、麦畑の中、麻畑の中、草の中、やぶの中、森の中、樹の上、切り株の上——などヴァリエーションが多い。

“植物の中にいる”の伝承のうちでは“キャベツの中にいた”(“нашли в капусте” “ў капустах ты сидела/лежала”)という表現形式のアンケート解答が最も多く、ポレーシエのウクライナ領域全体にわたって見られる。

“赤ん坊は植物の中にいる”の地図は“キャベツの中に”、“菜園の中に”、“畑の中に”の3種を記号分けしてそれらの分布を示している。“菜園の中”の場合は“豆の中に”、“ビートの中に”、“タマネギの中に”、“トウモロコシの中に”赤ん坊がいる。“畑の中”の場合は“オートムギ畑の中”、“ソバ畑の中”、“麻畑の中”である。

(4) “赤ん坊は樹の上に／森の中にいる”

4枚目の民俗地図は“樹の上から取る”、“森の中にいる”、“切り株の上にいる”、“やぶ(茂み)の中にいる”の4種の分布図である。“赤ん坊が樹(りんごの樹／梨の樹／柳／白樺)の上にいるのを見つけて取って来た”、“赤ん坊が畑の中にいたので家に連れて来た”などの説明は(1)の“赤ん坊はコウ

ノトリが連れて来る”ないし（2）の“赤ん坊は天から降りて来る”の伝承との混成（コンタミネーション）であろう。図によれば（4）の伝承の分布はプリピャチ川以南に集中している。

ドイツでは大人は子供たちに、赤ん坊は母親の胎内から出る、とは言わずに、“お産婆さん（Hebamme）が水（池／湖／沼）の中から連れて来る”と説明する。“子供の泉”“Kindelsbrunnen”の伝承はドイツでは広く知られている。例をあげれば、北東部の都市ブラウンシュヴァイク Braunschweig では、子供は町の東にある泉 Gödebrunnen から来る、と言われた⁴。ドイツ東部に居住するソルブ人の俗信においても子供の出現の場は水の世界である。ソルブ人たちは、Bademutter [“沐浴の母”＝“産婆”] が川や湖の深淵から赤ん坊を籠で汲み上げる、というふうに子供の誕生を説明した⁵。ポーシェでも同様に、水（川／湖／沼／大雨）が運んで来た赤ん坊を産婆が取り上げて連れて来る、という伝承がある。

人間は水の中では生活できない。しかし胎児は例外で水の中で生きる。胎児は10か月間、羊水の中にあり、臍帯のなかを通る3本の血管を通して、酸素や栄養素を母親からもらい、炭酸ガスや不用の老廃物を母親に返すことによって成長する。月満ちて、産道を長時間かけて通り抜け外界に顔を出したとたん、肺胞が開いて呼吸を始め、臍帯が切断されることによって水（羊水）の世界を離れる⁶。

民間伝承における“子供の泉”は“羊水”のメタファーであろう。しかし“水の中”が人間の居住を拒む“異世界”“иной мир”である以上、民間信仰においては子供は異世界からの到来者である。赤ん坊が降りて来る“天”も、赤ん坊が発見される“森の中”、“植物の中”、“樹の上”も人間にとっては異世界である。

赤ん坊を連れて来る者一鳥、動物、神話的存在、産婆（呪術師としての）、ジプシーやユダヤ人（異人）、聖ニコラウスーは異世界からの使者である。

赤ん坊は、このように、異世界からの来訪者の性格をもつために、実の親にとっても一種の“よそ者”の観がある。特に、生まれた子供につぎつぎに死なれた親にとっては、赤ん坊はわが子というよりも異世界から来ては異世界へと去って行く“よそ者”である。

この赤ん坊の“よそ者”的性格との関連において考えるべきものに、東スラヴ人や南スラヴ人のあいだに知られている赤ん坊の呪術的・儀礼的売買の習俗がある。

P. G. ボガトウイリョーフはカルパチアの山岳ウクライナ人の事例を報告している。

「子供の命を保つことのできない親は、生まれたばかりの赤ん坊を売ってしまう。子供を全員無事に育てているよその女にその嬰兒を窓から渡す。女はその子を買取るが、パンを持って中庭に立ち、次のような言葉を述べる。『父親も母親も、この世でもあの世でも、この子との縁はいっさい断たれたものと心得るべし』 それから子供をその実の両親の許に連れ帰り、テーブルの上に置いて言う。『大きくおなり。だって、おまえは私の子なのだから』 続いてその両親に向かい、『私のためにこの子を育ててください』と言う。そのとき、子供には『売られっ子 Продан』という名前が付けられる。その子はこの名で呼ばねばならず、洗礼名を使ってはいけ⁷ない」

赤ん坊の不思議な誕生の伝承の背景には、赤ん坊が祖先によって“あの世”“ТОТ СВЕТ”から“この世”“ЭТОТ СВЕТ”に送りこまれたものであるとする民間信仰がある。すなわち、赤ん坊は祖先のいる世界と同じ所から来る。

おそらくこの俗信を反映していると思える例として、カルーガ県で行われた子授かりの祈願の慣習をあげることができる。子供が欲しい女は小川へ行

き、子供を呼び出す。女の呼ぶ声にこたえて川の中で赤ん坊の泣き声がすると、女は子供を産むことになる。T. A. リストーヴァ T. A. Листова は、この慣習には“この世”と“あの世”とを結びつけているきずなとしての川の古代的な概念が役割を演じている、と考えている。その川は死者たちが流れにのって去って行ったばかりでなく、子供たちが“やって来る”道なのである。⁸

II 出産儀礼

1 出産まで

〈1〉産 屋

子供の誕生をめぐる伝承は北ロシアでは趣を異にする。北ロシアには南ロシアやベラルーシにおいては見られないバーニャ баня（蒸風呂小屋）があり、出産から死体の埋葬準備にいたるまでの人間の一生に関わる儀礼の多くがバーニャにおいて行われる。産屋となるバーニャは聖像（イコン）が置かれていない“不浄”な場所であり、意地の悪い風呂小屋のデーモンであるバンニク банник が支配する“異教の”領域であるために、出産には非常な危険がともなう。そのため、子供の誕生に際しては特別な呪術的儀礼が行われる。

“Трижды человек дивен бывает : родится, женится, умирает” (Даль, Пословицы 1862, 314) “人間は三度不思議なものとなる：生まれるとき、結婚するとき、死ぬとき”

この諺にあるように、誕生・結婚・死は確かに人生の三大不思議であるが、この場合、“不思議” “диво” は“奇跡” “чудо” とほぼ同意義であり、その不思議（奇跡）は呪術によって惹き起こされる。

“Свадьба без див не бывает.” (Даль 849) “不思議の起こらない婚礼はない”

この諺についてダーリが без див (不思議の起こらない) を без чудес (奇跡の起こらない) と注記しているように、婚礼にも呪術が介入する。埋葬儀礼は呪術そのものである。

誕生も、結婚も、死も人間のそれぞれの運命であるという意味で不可思議であるばかりでなく、そこにはまた奇跡を起こす呪術が働く。

出産儀礼は呪術的儀礼である。出産儀礼の目的は、人間にとって外なる世界から赤ん坊を受け取ることである。産婦と胎児は人間の外なる世界と結びついているために、異界から来る危険にさらされている。その危険性は分娩時に頂点に達する。

ロシアの北部地方においては、バーニャのほかに家畜小屋 хлев や納屋 клеть が産所とされる。産屋は人間の居住領域である母屋から離れたところにあり、自世界と他世界の境界であって、生と死の境界におかれている産婦の状況に対応する。

産婦は陣痛が近づくと、あたかも死出の旅路に発つかのように、親族・縁者に別れを告げる。

しかし、出産が近づいたことは外部に漏れないように極秘にしておく。出産の間近いことが他人に知られることが少なければ少ないほど、産婦の分娩の苦しみは少なくてすむ、と信じられた。産婦にとって最大の危険をもたらすのは乙女たちの存在である。ノヴゴロド県の情報に“なによりも悪いことは、分娩が処女に知られることであり、その場合、産婦は処女の髪の毛の一本一本のために苦しむことになる”⁹ というのがある。

〈2〉妊産婦の異常性

妊娠している女性是一種の神聖な存在として表象された。民俗学者スムツォフ Н. Ф. Сумцов によれば、妊婦は“その状況の例外性によってよびおこされる特別な神秘的な力により、部外者に、良きにせよ悪しきにせよ影響を及

ばすことがあり、しばしば悪い影響を与える¹⁰”。それゆえに、例えば、妊婦の頼みごととは断わってはならない、とされた。それを断わった者は服を鼠にかじられたり、財産を失う、などと言われた。

妊娠中の女性は危険にさらされている。胎児を魔物に奪われたり、すり替えられたりする。流産は妊産婦にかけられた呪い“порча”と説明された。そのため、妊産婦はときとして一種の“狂気”“безумие”に陥ることがある。妊婦が“狂気”のメタファーとなる“症例”は現代のロシアの産院においても見られるという¹¹。

赤ん坊が誕生する瞬間から（母の胎内にある時ですら）“神聖な力”と“悪しき力”とが人間の魂の取り合いをする、と信じられた。とくに危険なのは出産の瞬間である。出産には天使が立ち合い、母と嬰兒を見守るが、同時にデーモンが隙をうかがう。難産は“悪魔のいたずら”と説明された。

そのため、産婦は、出産が近づいたとき、懺悔をし、聖餐を受けるべきであるとされた。

すでに述べたように、産婦は分娩のため産屋に行く前に“この世”と近親に別れを告げ、“Смерть моя пришла.” “死がわたしをお迎に來た”と言う。

シベリアのロシア人のあいだでは産婦は“полупокойница” “半死人”と見なされた。ロシアの諺に言う。－

“После родов женщина десять дней в гробу стоит.” (Даль 404) “産後の10日間女は棺の中にいる”

産婦が一時的に人間世界の外にいるということは産婦と異界との関連を示すものであるが、その外的な根拠とされているのは産婦の不浄性である。産婦は産後の40日間は家畜の世話をするこゝも、搾乳するこゝも、穀物に触れるこゝも許されない。

産婦が異界と接触する内的根拠も報告されている。産婦は“一時的な死”を体験する¹²。

ロシア科学アカデミー人間脳研究所で行われた研究によれば、何人かの婦人は分娩時に自分が“自分の体から遊離する”ような異常を体験する。すなわち、それらの婦人たちは分娩時に自分を外側から観察しているような感覚におちいり、出産しているのは自分ではなく誰か他の人間であるかのような気になる。分娩時に産婦には痛みの感覚と通常の時間の流れの感覚が消える。この状況は数分間つづく。分娩のあいだ、異常な世界を見たり、宇宙空間を浮遊するような感覚をもったり、死んだ親族を見たりする。類似の感覚を産後に体験する産婦もいる。

ある報告例（1997年）によれば、ある婦人は産後数か月が経ってから毎朝日の出を見るようになったが、そのさい燃える日輪のなかに自分の葬儀を見るようになり、そこに近親者と同じ村の人々をはっきりと見分けることができ、他人の好意的な態度とともに、現実の生活において彼女の第二児の出産に反対であった近親者の不満を感じとった、と言う¹³。

〈3〉産 婆¹⁴

上に述べたように、妊産婦は自世界と他世界・生と死の境界におかれていたが、この二つの領域を結びつける媒介の役割を演じるのが産婆 *повитуха* である。

古来、あらゆる動物のうちで人間だけが子供の出産に際して助産を必要とした。産婦と嬰兒にたいする看護は太古の昔から合理的・医学的実践としてのみならず、民族的特性をもつ呪術的行為としても行われてきた。

首尾よい分娩はひとえに産婆の腕にかかっていた。農村の産婆は胎児を取り上げるばかりでなく、出産後の嬰兒と産婦にたいする必要な処置を呪術行為をともなう行なった。助産の基本的な処置は、臍の緒の切断、胞衣の始末、赤ん坊に産湯をつかわせること、産婦の体を洗うことである。

農村においては産婆 *повитуха* が出産の唯一の助け手であった。ロシアにお

いては医学的・看護学的訓練を受けた助産婦 акушерка あるいは産科医 акушер, врач-гинеколог が登場するのは農村部では19世紀末のことであるが、農民が助産婦や産科医に頼ることはきわめて稀であった。農民にとっては助産婦は“奥様”“барыня”や“令嬢”“барышня”の身分であり、産婦とその家族は自分たちの貧しさや家の中の乱雑さを彼らに知られることを恥ずかしく思った。それにたいして産婆は自分たちと同じ仲間の農民であり、農民の生活のさまざまな困難を理解してくれる存在であった。産婆はその呪術能力と助産技術によって数世紀にわたって農民の信頼を得てきた。産婆は陣痛に苦しむ産婦に優しく接して、産婦の心を落ちつかせ、励ました。産婆は赤ん坊を取り上げる技術にすぐれていたばかりでなく、止血剤や鎮痛剤になる薬草の知識をもち、ヘルニアを呪力で治すことができた。

助産にあたっての産婆の最も重要な任務の一つは新生児とその母親を魔物、“不浄な力”“нечистая сила”から護ることであった。産婆が助産に際して行う呪術の知識と能力は占い師（ворожей/ворожейка）や魔法使い（колдун/колдунья）の能力とは区別される。産婆は敬神の念の厚い正教徒であることによって村人の信用と尊敬を得ている。産婆は守護的な効力をもつキリスト教的呪物一香、聖水、祈祷書など一を用いる。

産婆は産婦の身を案じてまず最初に聖像の前の蠟燭に火をともし、このことは絶対に必要な行為とされた。取り上げた赤ん坊がのちに病気になると、その子は“灯明のないところで生まれたのではないか”と産婆の手落ちであるかのように言われた。灯明としてともされる蠟燭は大切に保存されていた婚礼の日の蠟燭でなければならなかった。結婚式の時に用いられた蠟燭は、民間伝承によれば、産みの苦しみを和らげる効力をもつばかりでなく、治療力があって、難産の産婦を死から救う、と信じられた。

灯明をあげたあと、産婆は祈祷をはじめが、さまざまな聖者たち—ゾシマとサバティア、預言者アンナ、エジプトの聖マリアなど—や聖母に呼びか

けるが、それは祈祷というよりは呪文（заговор）である。産婆の、あるいは出産の最高の守護聖人はソロモニーダ Соломонида（ソロモニヤ Соломония, ソロメーヤ Соломея）である。ソロモニーダは聖書外典（アポクリファ）の『ヤコブの原福音』“Протоевангелие Иакова”によれば、マリアの聖なる出産の際にヨセフに呼ばれた産婆である。キリスト降誕のイコン図像においてソロモニーダは白い衣を身につけて幼な児イエスに産湯をつかわせている姿で描かれていることがある。

俗信によれば、ソロモニーダは、キリストの誕生に際して、ロシアの農村の産婆が行うのと同じ助産の行為をした。嬰兒と母親の健康はソロモニーダの看護下にあった。呪文において助産はときとしてソロモニーダの行為に仮託された。

みどり児よ、おまえを取り上げたのはわたしではなく、おまえにおむつをしたのはわたしではなく、おまえのからだを洗ったのはわたしではなく、ソロモニーダ婆さんだよ。

ソロモニーダ婆さん、キリストさまの取り上げ婆さん、キリストさまのお体を蒸し、お手とおみ足を直し、われらがみどり児を蒸風呂に入れた。

おまえに産湯をつかわせたのはわたしではない、おまえの手足を引っぱるのはわたしではない。ソロモニーダ婆さんがおまえに産湯をつかわせ、手足を引っぱったのだ。おまえに“わが子よ、一時間ごとに大きくなれ、一分ごとに大きくなれ”と言ったのはソロモニーダ婆さんだよ。

産婆の呪文で民俗学者たちによって記録されたテキストはきわめて少ない。出産に関する呪文は産婆たちのあいだで極秘のうちに伝承され、部外者に伝

えることが禁じられたためである。

〈4〉分娩促進

産婆は分娩を促進するためにさまざまな手段を用いる。香炉から取った灰を産婦に飲ませ、麦角（спорыня）とオグルマ（旋覆花）（девясил）の根などを調合してつくった薬剤を与えた。出産を楽にするために産婆は産婦の衣服の結び目をすべてほどき、また髪をほどいてやる。産婦の腹部をマッサージしながら“骨盤よ、道をあけよ、開け、胎よ、開け、広がれ”と呪文を唱える。

出産をはやめるために、ときに産婦に嘔吐を起こさせることがある。産婦に自分の髪の毛を口の中に突っこませて吐き出させる。これは“吐き出す”と“産み出す”、“口”と“産道”の平行関係に基づく儀礼行為と解釈される。

〈5〉擬娩（クヴァード）

産婦の夫が分娩に立会い、一定の役割を果たすことによって妻の陣痛を緩和し、出産を速める儀礼行為がロシア人のあいだに知られている。この行為は古代的な“クヴァード”“couvade”（кувада）の風習と起源的に結びついている。擬娩の特徴を最も完全な形で継承している風習はスモレンスク県では19世紀末と20世紀初頭にまだ見られた。目撃者の証言によれば、夫は妻の分娩に際して陣痛の苦しみを模して呻き、叫び、“亜麻布のように蒼白になり、鑄鉄のように黒くなる状態にまで陥る”¹⁵。

夫が妻の産みの苦しみに参与する擬娩の風習はポレーシエにおいても20世紀初頭まで見られた¹⁶。情報の分析から、その状況は、（1）夫が自分の意志にかかわりなく苦しみを経験する、（2）夫が自ら妻の苦しみを表現する、の二つのタイプに分類することができる。

（1）産婦ないし産婆が男性に苦しみを蒙らせる。

実例を挙げよう。陣痛に苦しむ妻が夫に、洗濯杵を渡してくれ、と頼む。妻は洗濯杵を背中の下に置くかと思いきや、それで夫を打つ。不意に殴打された夫が“おまえ気でも狂ったのか”と妻に訊くと、“痛いのか？ わたしの痛みがあなたにも移るように！”と妻は答える。

産婆がイニシャティヴをとることがある。産婆が暖炉の上の寝床にいる夫の陰茎に糸を結びつけ、その糸の端を産褥の妻の手に持たせる。陣痛の発作が起こるたびに産婦が糸を引っばると、このにわかづくりの“電信装置”によって妻の痛みが夫に伝わる。

呪文だけで妻の産みの苦しみを夫に移すことのできる産婆もいた。

“夫は倒れて膝で這う。妻は子を産み、笑う。妻に痛みはなく、夫に痛みあり”

(2) 夫が自ら産みの苦しみを表現する。

分娩が長引くと、夫は妻の産褥のそばに身を横たえて、妻が自分の上をとり越えるのを待つ。あるいは寝床に手足を伸ばして寝て、呻いたり、叫んだりする。表階段に立ち、あるいは屋根の上にのぼって、呻き、叫ぶこともある。

ペラルーシの伝承によれば、昔は男はみな妻の産みの苦しみを自分の身に負うたという。妻の出産の前に夫は妻の目をじっとのぞきこみ、そのあとで家を出て、森の中にはいって行き、そこで叫び声をあげながら立ち樹に体をぶつける。そうすると妻の出産が楽になり、夫は痛みを感じることによって、妻の苦痛の一端をわが身に負う。

夫の象徴的な助産行為は別の形をとることもある。

- ・夫婦が敷居をはさんで向かい合い、夫が水を口移しに妻に飲ませる。
- ・夫が床に横たわっている妻を跨ぐ。逆に、妻が夫の脚の上を（あるいは夫のズボンやベルトの上を）三度跨いで通る。
- ・陣痛を促進させるために、夫に“いつもしていること”（性行為）をさせ

ることさえある。

以上のポレーシエの擬娩の情報を記述したカバコーヴァ Г. И. Кабакова は、妻の出産に際しての夫の助力は、本来は、赤ん坊を魔物から護る儀礼行為であった、と解釈している。

〈6〉臍の緒¹⁷

分娩の最後の段階は胎盤、胎衣（плацента/послед/место）の排出である。赤ん坊を分娩後半時間以内に胎盤を出すことができない場合は、産婆は胎盤を排出させるために補助的に呪術的手段を用いる。その一つに猫を呼ぶ声で胎盤を“呼び出す”方法がある。産婆は“кыс, кыс, кыс クイス, クイス, クイス”と呼びながら、そつと臍の緒を引っばる。安産型の女性を“猫のように子供を産む”というが、この儀礼行為は、おそらく、猫の多産と安産のイメージに基づくもの、と思われる。

胎児が出産されると、臍の緒が切断される。臍の緒はふつう赤ん坊の腹から指3本分の長さのところではさみで切断される。それよりも少しでも短いと、女の児は尻軽な娘となり、男の児は生殖器官の未発達な男になる、と言われた。臍の緒はときには歯で切断されることがあるが、これはヘルニアにならないための呪術的行為である。爪で切る地方もある。母親の髪の毛（右のこめかみから引き抜いた）で切る地方もある。

臍の緒は切断されると止血のために結わえられるのがふつうである。臍の緒は晒していない麻糸で結ばれることが多いが、母親の髪の毛（右側の後れ毛）を用いることもある。臍の緒の結び方が悪いと赤ん坊は成長しても体の弱い子になる。

このように、臍の緒の切断と結びは分娩の過程における産婆の最も重要な任務であるが、つねに呪術的意味をもつ。

切り取られた臍の緒も呪術的目的に用いられた。出産時、産婆は切り取ら

れた臍の緒で赤ん坊の両頬をこする。そうすることによって赤ん坊は成長して美男か美女になる、と信じられた。

臍の緒は慎重に保存しなければならない。地中に埋める場合は、のちに述べる胞衣埋葬と同様に、犬に掘り起こされないような場所を選んで埋める。そうでないと赤ん坊に害が及ぶ。

臍の緒が御守りにされることもある。その場合、金のかけら、水銀の滴のような呪物と一緒に香袋に入れて赤ん坊の首にかけ、7年ほど経ったとき、はずして長持の中に収う。また、臍の緒を親梁の上や戸口の鴨居に置くことがある。親梁や鴨居の下を通る人が多ければ、それだけ多くの人から子供は将来尊敬を受けることになるという願いをこめた行為である。

臍の緒にはまた、女性の不妊症を治す力があるとされた。臍の緒の煮出し汁にその効力がある、と信じられた。ウクライナでは不妊の女性は新生児の臍から出た数滴の血を注ぎこんだ水を飲んだ。

〈7〉胞衣埋葬¹⁸

ロシア人の伝承においては、他の多くの民族の伝承におけると同様に、胎盤（胞衣）を新生児の双子と見る考え方がある。胞衣は胎児の一部である。生まれ出た赤ん坊はこの世に来るべく運命づけられているのに対して、あとから出てくる胞衣はあの世に行くべく運命づけられている。日本では、後産によって排出された胎盤を俗に胞衣という。胎内にあつては胎児と胎盤とは臍帯によってつながっていたのである。

胞衣は産婆によって注意ぶかく清潔な白い布で受けとめられ、洗われて、経帷子に包まれて、儀礼的に埋葬するために別の場所にとって置かれる。

胞衣は大切に扱わなければならない。胞衣を大切にすることによって赤ん坊の健康が保障されるからである。胞衣はときに産婆が呪文を唱えながら埋葬する。——“胞衣は朽ち、赤ん坊は生きねばならぬ、神を愛し、父母を敬

い、産婆のことを忘れてはならぬ”。

胞衣は履き古された鞆皮の百姓靴の片方（右足でなければならない）に入れて、農家の聖像棚のある隅の床下か、地下室の土の中にあるいは隣家の所有地との境界をなす地に埋葬される。

オレンブルグ県では分娩がすむと産婆が胞衣を大地の中にパンと塩と一緒に深く埋めて、“ほらここがおまえのための聖なる地だよ、そして神のしもべ（某——男の児の名を言う）は健康に恵まれるように”と呪文を唱える。

胞衣は自然から出て自然へ還る。——“土から生まれたものは土に身をゆだねよ、ここなる神のはしため（某——女の児の名を言う）は地上にとどまれ”という呪文もある。

胞衣の処理は赤ん坊の将来に影響を与える、と考えられた。ウクライナ人のあいだでは、赤ん坊が幸福になるように、と胞衣を水に流す。

ロシア人のあいだでは、自然から産まれた赤ん坊の身代りとして土に還った胞衣は大地の豊饒にたいする影響力を分与される、と考えられた。それゆえ、畑に豊作をもたらすために胞衣を肥料の中に埋葬することもある。

胞衣にとっても新生児にとっても特に危険なのは犬の存在である。犬は異界と結びついている。北ロシアの俗信によれば、胞衣は“犬に掘り返されないように”注意して地中に埋めなければならないとされた。

地下室の地中に胞衣と臍の緒を埋める場合は、臍の緒を上胞衣を下にして埋める。そうすれば赤ん坊は元気に育つ。臍の緒を下にすると赤ん坊は死ぬ。

胞衣の埋葬の場所が次にできる子の性別に影響する、と信じられた。次に男児が欲しいときは胞衣を聖像棚のある隅の床下に埋葬し、女児が欲しいときは他人の畑に埋葬する。

ロシアの魔法使いの女（колдунья）は、産婦にそれ以上子供ができないようにするために、胞衣を盗む、と言う。

〈8〉大網膜信仰

羊膜の一部である大網膜 (caul) をかぶって生まれてきた子供が幸運児であるという俗信はヨーロッパに広く知られている。ロシア語で大網膜は“シャツ”と同じ語の“сорочка”あるいは“рубашка”であり，“родиться в сорочке”“シャツを着て生まれる”は“幸運に生まれつく”を意味する慣用句である。この慣用句を字義どおりに解釈するかのように、赤ん坊は、たとえ大網膜をかぶっていなくとも、幸せに生まれつくようにと、シャツの中に産み落とされる。実際には、父親が着ていた洗濯していないシャツが赤ん坊を受けとめるために用いられた。この行為には父親と子供との愛のきずなを確かめる意味もあった。父親の愛はわが子のために“自分の着ていたシャツを脱ぐこと”によって保証されたのである。

2 出産後

〈1〉産婆による赤ん坊の整体

出産に関わる儀礼は赤ん坊の生後8日間に集中している。生まれたばかりの赤ん坊はいまだ不完全な人間と考えられ、人間の形に整えるためにバーニャで“蒸された”。ここで新生児の生まれつきの欠点が矯正される。

ひよろ長い頭、とんがり頭で生まれた赤ん坊の頭を産婆はバーニャで蒸して、まるい形に整えようとする。もしこの試みが失敗すると子供は長生きできない、と考えられた。ひよろ長い頭、とんがり頭は妖怪の頭の形である。クリスマス期に現れる北ロシアの妖怪シュリークンはそのような頭の形をしている。19世紀の民衆版画（ルポーク）に描かれている水の妖怪ヴォジャノイもひよろ長い、とんがり頭である。

産婆はまた、赤ん坊を抱いて、鼻ぺちやにならないように、鼻をつまんで高くさせ、鼻の孔を収縮させたり、手や足を引っぱって整体する。

8日目に産婆は、赤ん坊の目が見え、耳が聞えるなど諸器官が働くようになるため、一定の儀礼を行うとされるが、その実態は不明である。

〈2〉非人間から人間へ

誕生に先立つ数日間は言うにおよばず、誕生後の最初の8日間は、赤ん坊はまだ完全な人間と見なされない。赤ん坊は“神の祝福”“神からの贈物”という意味でボグダン、女児はボグダナ Богдан/Богдана（神の与えし者）という一時的な名前と呼ばれるのがふつうである。

“Не крещен, так и Богдан”（всех ребят до крещения зовут Богданами）（Даль 401）“洗礼を受けていない児はみなボグダン”

この一時的な名前をつける習慣は、単に誕生しただけでは赤ん坊は完全な人間になったということにはならない、というロシア人の観念と関連している。誕生の直前と直後の数日間は、バイブーリン A. K. Байбурин の言葉を借りれば、“非人間”“нечеловек”から“人間”“человек”への過渡期である¹⁹。この間に行われる一定の儀礼は“通過儀礼”である。

8日目の儀礼が終わったあと、赤ん坊ははじめて正式に新しい人間として世に出たことになり、そのしるしとして新しい産着を着せられ、新しい名前がつけられる。子供の名前はふつう“святцы”とよばれる教会暦から選ばれ、子供の誕生日のあとの聖人の名がつけられる。聖人の名が好ましくないときは、男児には祖父や大伯父の名が、女児には祖母、大伯母、伯母の名が選ばれる。

〈3〉死をあざむく儀礼²⁰

新生児は突然原因不明の病気にかかることがあり、つねに死の危険にさらされている。そのため、死をあざむく儀礼が行われる。

（a）死の周りで踊る儀礼

瀕死の赤ん坊のゆりかごの周りで母親が踊ることによって母親が死と接触し、死を追い払い、死を倒す。分娩をした産婦の周りで産婆や近親者が踊るのも、同様に、死を防御する意味をもつ。

(b) 赤ん坊の擬似埋葬

ベラルーシ人のあいだでは、子供がひきつけの発作を起こしたとき、家の中が厳粛な静けさにつつまれたようにする。母親は子供を白い掛布でくるみ、その上方に火をともした蠟燭をかがげ、香を焚くなどする。要するに、家族の誰かが死んで、家が“忌中”であることを部外者や訪問者に分からせるような雰囲気をつくり出すのである。子供を奪いに來た“死”も子供はすでに死んだものと思って、子供に手を出さない、という考えによる(1882年記録)。

(c) “再分娩”

赤ん坊が虚弱で、死ぬおそれがある場合、行われる。母親は分娩が行われた場所に立ち、赤ん坊を抱いて、産婆の助けを借りて、自分のシャツの襟に赤ん坊を上から下に向けて三度くぐらせる。

(d) 赤ん坊の“売り渡し”

新生児に死のおそれがあるときに行われる儀礼。ウクライナでは、病気の赤ん坊を二束三文で通りすがりの人、乞食、巡礼、あるいは親戚の誰かに“売る”。もちろん、実際に赤ん坊を渡すことはなかった。この儀礼的な“売り渡し”は、赤ん坊が早死しそうなときに行われた。この習俗はウクライナでは非常に根強いものであった。

一般化された形では次のように行われた。

赤ん坊の洗礼の前に(赤ん坊はかならずしも病弱である必要はない)、床に広げ敷いたコージュフ〔裕福と幸福のシンボル〕の上に赤ん坊をのせ、代父たちがコージュフの上に小銭を投げる。民衆の説明によれば、投げられた小銭は代父たちによる赤ん坊の身受けを意味した。あるいは、悪しき力をあざむくための“投げ売り”と解釈された。

カルパチアの山岳ウクライナ人の場合については前述のごとくである。

〈4〉魔除けのための洗礼

新生児が罹るさまざまな病気や症状は民間信仰では“сглаз”（邪視の呪い）によるものとされた。赤ん坊の夜泣きやひきつけはその典型である。邪視の持主が誰であるかは分からないが、例えば、茶色の眼をした人と接触することは危険視された。出産した婦人は40日間は“不浄”と見なされて、儀礼的に隔離された状態にあったが、部外者から遠ざけることは邪視に会わないためという理由もあった。産婆は邪視の呪いを祓う能力をもっていた。多くの場合、聖水と祈祷で邪を祓うが、特別な呪術を行うこともある。

赤ん坊を奪う、あるいは醜い不具の子とすり替える魔物もいる。分娩がバーニャで行われる北ロシアではバーニャの怪バンニックやオブデリーハが危険視された。

新生児を悪霊から護る最も安全な方法は洗礼である。教会の見解では、洗礼はキリスト者としての新生の儀式であるが、嬰兒洗礼は魔除けの意味が強い。

洗礼を受けずに死んだ嬰兒は妖怪キキーモラと化すと信じられ、その運命は悲劇的であると思われた。赤ん坊が未受洗のまま死ぬことがないように、赤ん坊は誕生後の数日間に受けることが望ましいとされた。赤ん坊に早いうちに洗礼を受けさせようとする傾向は、明らかに、幼児の死亡率の高さに関連している。18世紀においては毎年生まれる50万人の新生児のうちの半数は3歳に満たないうちに死んだ、と推定されている。シンビリスク県のある村の1867年の記録ではその年に生まれた子供200人のうち180人が死亡しており、そのうちの大部分が1歳に満たない嬰兒である。

洗礼は教会の儀礼であるにもかかわらず、緊急の場合には産婆が新生児に洗礼をほどこすことがあった。産婆はふつう深皿の中で聖水を真水で薄め、

それを三回赤ん坊の頭に注ぎ，“父と子と聖霊のみ名によって，アーメン”と唱えて，赤ん坊に名前を与える。

革命後は教会の破壊と関連して，産婆の手による嬰兒の洗礼はいつそう普通のこととなった。教会は未受洗の子供の死を回避するために産婆による“魔除けの洗礼”を条件づきで認めざるを得なかった。

〈注〉

- 1 谷口幸男，福嶋正純，福居和彦著『図説・ドイツ民俗学小辞典』同学社，1985年，p. 11.
- 2 Л. Н. Виноградова. Откуда дети берется? Полесские формулы о происхождении детей // Славянский и балканский фольклор. Этнолингвистическое изучение Полесья. М., 1995, с. 173—187.
- 3 Восточнославянский этнолингвистический сборник. Исследования и материалы. М., 2001, с. 308.
- 4 Рождение ребенка в обычаях и обрядах. Страны зарубежной Европы. М., 1997, с. 167.
- 5 W. Schulenburg. Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin, 1882, S. 108.
- 6 杉立義一『お産の歴史』（集英社新書），2002年，pp. 116—117.
- 7 Р. Г. Богатырев / 千野栄一・松田州二訳『呪術・儀礼・俗信—ロシア・カルパチア地方のフォークローア—』岩波書店，1988年，pp. 148—149.
- 8 Русские : Народная культура (история и современность) том 3. Семейный быт. М., 2000, с. 276—277.
- 9 Н. Е. Мазалова. Состав человеческий : Человек в традиционных соматических представлениях русских. СПб., 2001, с. 99.
- 10 Русские : Народная культура. том 3. с. 182.
- 11 Т. Б. Щепанская. Мифология социальных институтов : Родовспоможение // Мифология и повседневность. Выпуск второй.

- Материалы научной конференции 24—26 февраля 1999 года. СПб., 1999, с. 395.
- 12 Там же, с. 394—395.
 - 13 *Н. Е. Мазалова.* Указ. соч., с. 105.
 - 14 *Т. А. Листова.* Обряды, обычаи и поверия, связанные с повивальной бабкой // Русские. Семейный и общественный быт. М., 1989. с. 142—171.
Т. А. Листова. Первый год жизни // Русские : Народная культура. том 3. с. 174—231.
 - 15 *В. Н. Добровский.* Смоленский этнографический сборник. СПб., 1984, ч. II. с. 37.
 - 16 *Г. И. Кабакова.* Антропология женского тела в славянской традиции. М., 2001, с. 69—71.
 - 17 *Н. Е. Мазалова.* Указ. соч., с. 106—107.
 - 18 Там же. с. 108—109.
 - 19 *А. К. Байбурин.* Ритуал в традиционной культуре. СПб., 1993, с. 40—41.
 - 20 *В. И. Еремина.* Заговорные колыбельные песни. // Фольклор и этнографическая действительность. СПб., 1992. с. 29—31.